

信州・伊那谷を30年にわたって放浪した俳人、井上井月(1822〜87年)が近年、静かな注目を集めている。映画の制作や関連本の出版なども続く。幕末から明治にかけての激動の時代に背を向けたような人生が、なぜ現代人の心をとらえるのだろうか。

(待田晋哉)

△翌日しらぬ身の楽しみや花に酒▽

井月の生涯の多くは、謎に包まれている。幕末の1858年頃、30代半ばで伊那に現れたという。気に入る家があれば泊めてもらって俳句などを書き残し、また別の家に行くという、住所不定の暮らしを続けた。酒が好きで、機嫌が良いときは「千両千両」と語るのが口癖だった。

今では、新潟の長岡藩の下級武士の生まれと分かっている。松尾芭蕉に心酔し、若き日は江戸、京、大坂を旅した。自らのことをあまり語らず、漂泊の末に行き倒れるように亡くなった。

△何処やらに鶴の声聞く霞かな▽

臨終の句も、淋しげだ。

そのままだれられておかし

俳人 井上井月ブーム

放浪と絆 現代人の共感



井月像(橋爪玉斎 画)伊那市創造館提供

「不安定の中の安定」

『井月句集』を編んだ復本一郎・神奈川大名誉教授に、その魅力を聞いた。

井月が生きた時代の作品の多くは、後に俳句革新を遂げた明治の俳人、正岡子規から、頭で作ったような「月並俳句」と批判されました。だが、その時代にありながら井月は見たもの、聞いたもの、感動したことなどを大切に句を詠んだ。

<泥くさき子供の子髪や雲の峰>。入道雲がもくもくと立つ下で、伊那の子供たちが遊んでいる情景が目には浮かびます。これは、松尾芭蕉の影響が大きい。当時の俳諧師が芭蕉を神格化する中で、井月は崇めるだけでなく、作品から学んでいた。

「乞食井月」などと呼ばれますが、実態は少し違うと思う。古典や書など相当の教養を持っており、俳諧を愛する伊那の人たちに句の添削をし、書の揮毫を頼まれてお金を得ることもあったでしょう。「不安定の中の安定」とでも呼べる生活から句は生まれたのです。

くない男が今、なぜか熱い。

北村皆雄さん(72)の映画『ほかいびと 伊那の井月』(2011年)の公開後、復本一郎編『井月句集』(岩波文庫)が出版され、作品を味わいやすくなった。伊藤伊那男『漂泊の俳人 井上井月』(角川学芸出版)、北村さんの『俳人井月』(岩波現代全書)など初学者向きの本も相次ぐ。

実は、現在ほどの知名度はなくても、井月の句には脈々と愛読者がいた。作品が残ったのは、伊那出身の医師が1921年、各家に散在した作品を集めて句集を私家版で出し、知人の芥川龍之介が激賞したためだ。山口出身の自由

律俳人、種田山頭火も、放浪の大先輩としてあこがれ、墓を訪ねた。異色漫画家、つげ義春さんも『無能の人』で、自身の蒸発願望と重ね合わせ

るように井月を描いた。北村さんは現在の井月ブームを、戦前、つげさんの漫画が出た80年代に続く第3期ととらえる。「従来、特異な『放浪』の側面を強調されがちだった。最近では、一宿一飯のお札に句を残した井月と地域の人々との触れ合いや筋を通して生きた方が注目されている」と話す。

雪を抱く山々、天竜川に沿って続く田畑。春に向かう伊那を訪ねると、優しい光景が広がる。句集を開く。△春の日やどの児の顔も墨だらけ▽

井月が放浪を続けた信州・伊那谷はのどかな田園風景が広がり、多くの句碑が立つ



紙▽

△ひとつ星など指して門すゞみ▽

長野県伊那市には、市の施設に展示室ができ、数多くの句碑も立っている。地元で顕彰活動をする矢島信之さん(70)は、「晩年に肉体は衰え、色々あったかもしれないけれど、井月は30年も地域の人に愛されたのです」と強調する。

世のしがらみから逃れる気持ちと、地域の絆に支えられた生活。時代におもねることなく、井月はこの遠心力と求心力の間を生きた。

1800とされる句に糸を張る矛盾した魂の緊張感が、現代人の共感を呼んでいる。

「放浪」と言えば、孤独を